

# 米の生産とともに延びた 四村共同の用水路



昭和23年米軍撮影の航空写真に写った水路の一部

## 寒冷の北海道で米作りが可能に

北海道に入植したすべての人は、米を作ってご飯を作って食べたいと思っていた。しかし寒冷なため開拓使は米作を許さず、麦などを作らせた。

どうしても米を作りたい人たちが本州の出身地からモミを取り寄せて試作をし、その熱心さにうたれた開拓使もモミを配給したが、やはり冷害のためうまくはいかなかった。

多くの人があきらめるなかで成功する人もできた。札幌で初めて米作に成功したのは明治6年(1873)で、明治14年(開田碑文による。白石村史では16年)には上白石村でも試作が成功し、それに希望を得た人たちが次から次へと米作を始めた。

## 平岸村が用水路開削

平岸村では日用水を豊平川から汲み上げて運んで使っていたが、より便利にするため、明治6年に精進川から堀を

造り、澄川から天神山の西側を通り、平岸街道を現在の北海高校前を経て豊平川に注ぐ5.3<sup>キ</sup>を40日間で完成させた。

この用水が後に豊平、平岸、白石、上白石の4村の田畑へ水を注ぐ母川となった。明治20年(1887)の記録(次頁左上)を見ると、かなり米作が広まっているのが分かる。

## 4村あげて用水路開削へ

明治21年(1888)には本格的な稲作を進めるために、豊平、平岸、白石、上白石の有志による五カ村有志農談会を組織し、共同用水路の開削について協議を始めた。

明治25年には平岸、豊平、白石、上白石の4村の代表者が集まり、水利組合発起人会を設立し、翌26年5月29日に用水開墾請願書を北海道長官に提出した。

工事補助金として見積額の2分の1を申請したが、翌月に却下された。

翌27年1月、4村の代表者は再協議



村名	作付面積	収穫
平岸	7反	なし
豊平	7反	1,080 <sup>キロ</sup>
上白石	6.5反	1,170 <sup>キロ</sup>
白石	73町歩	157,680 <sup>キロ</sup>
月寒	73.5町歩	131,580 <sup>キロ</sup>

(明治20年調べ)

して豊平外三カ村聯合用水組合を設立し、2月20日に再び用水開墾請願書を提出した。

9月15日に工事認可が下りた。工事費1,660円のうち補助金が490円で、12月までに工事を終わらせることが条件だった。わずか3カ月の工期である。

幹線用水路は明治6年にできていた平岸用水堀を改修して使い、その途中から1～4号用水路を開削して4村に水を引くのだが、幹線と1号～4号合わせて23<sup>キロ</sup>に及ぶものだった。

この工事は11月1日に工事入札し12月18日に完成にこぎつけた。実際の費用は910円で、補助金490円、4村88人の寄付404円、不足金16円だった。

#### 自主管理で民主的に運営

明治28年(1895)に水門修理や用水路掃除を取り決めた聯合用水路組合規程を改正し、各用水路は各村が自主管理するほか、用水量の増加、減水時などの対応は全組合員が協議のうえ合同作業を行うことなどを決めた。

明治35年に二級町村制が敷かれ、豊平役場と白石役場が成立した。両役場直轄の用水組合が用水を管理することになり、明治39年(1906)に用水路事業



昭和23年米軍撮影の航空写真に写った1号用水路と2号用水路

は強制的に役場へ移管させた。しかし60～70円だった負担金が400円になったうえに、洪水で橋や水門が破損してもすぐに修理されなかったために、組合員からの申し出により明治43年に再び組合の管理にもどった。この年に豊平村と上白石村の一部が札幌区に編入



1号用水路。豊園小学校から白石側を見る(昭和33年)

#### 四カ村聯合用水路

(明治45年重延実所蔵・用水路設計平面図から)

明治27年12月竣工		
地域	用水路	延長
平岸村	幹線	3,248間(5,904m)
豊平村	1号	2,320(4,217)
"	2号	2,352(4,275)
"	3号	3,376(6,137)
"	4号	1,344(2,423)
以下明治45年までに竣工		
豊平村	5号	632(1,148m)
"	6号	244(443)
白石村	7号	1,050(1,908)
"	8号	393(714)
"	9号	210(381)
"	10号	375(681)
"	11号	67(121)
"	12号	297(539)
"	13号	134(243)
"	14号	520(945)
"	15号	492(893)
合計		17,045(30,993m)

され、大正に入ってから豊平外四カ村の組合となった。

用水の需要は年ごとに高まり、豊平村に5、6号用水路、上白石村と白石村に7～15号用水路が明治45年までに造られ、総延長は31<sup>キロ</sup>に及んだ。

大正に入った頃から、毎年9月1日を4村の全組合員による溝さらいの日と決め、終了後は4村組合員の慰労会を行った。総会時には記念式典、品評会、褒賞授与などを行い、4村の貴重な交流、親睦の場となった。組合は物価が高いときには出面賃の協定も行き、田植え、草取り、代かきの賃金を低く抑え、送り迎えを廃止するなどの調整の役目も果たした。

#### 戦後のピーク以降都市化で解散へ

昭和22年(1947)に農地解放が行われ、自作農が増え、戦後の米需要にも支えられて用水需要も高まったが、その後は都市化の影響で水田耕作者が減り続け、ついに昭和36年(1961)に聯合用水組合は解散した。

明治6年以来の平岸幹線は87年の使命を終えて埋め立てられて暗渠となり、拡幅された平岸街道は2車線の幹線道路となった。前後して1～15号用水路もすべて暗渠または埋め立てられた。

(富岡秀義)